努力賞

母親のあたたかさ

瑞光小学校　五年　津久戸　考平

柳田邦男さん、こんにちは。僕は「手ぶくろを買いに」という絵本を読みました。この絵本を紹介したいと思います。僕はこの絵本を読んでいろいろなことを感じました。その感じたことについて紹介します。

この本は、子狐が人間の町へ行き、手ぶくろを買う物語です。そしてこの絵本の中心は母親のあたたかさです。僕がこの絵本を通して一番感じたのはこの母親のあたたかさです。この絵本の子狐が、手ぶくろを買ったあと、人間の母親の唄と親子の会話を聞いて、母親が待っている方へ跳んで帰る時に感じました。僕はその時に昔のことを思い出してなつかしい気持ちになりました。その昔の思い出は、初めておつかいに行ったことです。近所のそば屋に行きました。そこは、そばのめんつゆを売っている小さな店でした。今考えると、家から五十メートルくらいしかない場所だけれど、その時はとても遠く感じました。お金をにぎりしめて、ドキドキしながら行って帰ろうとしてふり返ったら、そこに母が心配そうに見ていました。人間でも狐でも母親のあたたかさは、同じなんだなぁと思いました。

この絵本は、なんだかなつかしい気持ちにさせてくれ、心があたたまります。柳田邦男さんも「手ぶくろを買いに」を読んでみてください。